

榊原報告・東村報告へのコメント

辻 智子

目次

0. 自己紹介

1. 生活記録運動とは何か
2. 「生活記録運動的発想の継承」をめぐって
3. 言葉とその意味の生成—生活記録と記号論
4. 生活記録実践と 1950 年代の政治的文脈

0. 自己紹介

私は、生活記録をはじめとする様々な実践の現場とそこへの直接的なかかわりに関心を持ってきた者で、研究としては 1950 年代日本の紡績女性労働者の生活記録運動について継続的に取り組みつつ、実践・運動としては国際協力 NGO の活動から識字学級・自主夜間中学へと展開し、1990 年代半ば以降は主に女性運動や女性の学習活動、青年団などの地域青年運動に様々な立場からかかわってきました。かかわり方は状況に応じて異なりますが、東日本大震災以降は日本青年団協議会とともに『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』（第 1 号 2012 年 3 月、第 2 号 2013 年 3 月）という記録づくりをしながら地域で生きる青年たちの暮らしとそれを支える集団活動について共に考える取り組みなどもしています。こうした実践では、たとえ私の立場が助言者・チューター・講師であっても、そこで課題となっている事柄については私自身もまた（より直接的に）一人の当事者であるようなかかわりが求められました。それは研究においても常に意識してきたことでしたので、生活記録運動と向き合う時の私の基本的な視点もまた、そこで書いたり読んだり話し合ったりする人びとの内側からの視点に、どうしても重ね合わせて見るところがあります。

『母の歴史』（木下順二・鶴見和子編、河出書房、1954 年）などで知られている生活記録サークル「生活を記録する会」と、ここ 20 年ほどお付き合いをしてきました。私が書いた卒業論文を鶴見和子さん経由でサークル世話人の澤井余志郎さん（三重県四日市市在住）にお送りしたのがきっかけです。1950 年代に生まれたサークルと 1990 年代

に直接的に出会うことが可能だったのは、「生活を記録する会」が 1960 年代以降も集まりを継続し、通信や文集を発行しつづけてきていたからです。それら実際の通信・文集や書き手本人たちと直接接してみると、単行本や新聞報道あるいは「知識人」を通じた紹介や伝聞によって伝えられるサークルの姿との違いを感じます¹。

そう考えると 2000 年代に入って「生活を記録する会」の膨大な文集・通信等の記録（1952 年～2008 年）の復刻出版（『紡績女子工員生活記録集（全 12 巻）』日本図書センター、2002 年／2008 年）が実現したことはとても貴重なことだと言えましょう。資料のほとんどは未刊行のガリ版刷りの手づくり文集で、日記やメモ、話し合いの記録などを含んでおり、基本的にはサークルの中で共有されるために作成されたものです。そこには、メンバーから見える「知識人」や研究者の姿も記録されています。したがって、1990 年代以降とはいえ、サークルの集まりに参加し、復刻出版作業にかかわり、90 年代以降の書くことに直接的に関与した私もまた、彼／彼女らによって見られ書かれる存在となっています。後年、私自身が研究の俎上に乗せられることも想定されるというわけです。

自己紹介が長くなりましたが、これから申し上げるコメントは、こうした私の立場と視点からのものです。

1. 生活記録運動とは何か

お二人の報告を受けて議論をするには、その前提として、そもそも生活記録運動とは何か、それをどのようにとらえるかという基本的な共通認識ないし議論が必要になると考えます。生活記録運動と言っても、実態も、その言説上のイメージも一枚岩ではなく、かなり多様なものを含んでいると思えるからです。議論への橋渡しをする意味で、

¹ こうした問題意識から拙稿『生活記録サークルの実証的研究—1950 年代女性繊維労働者における書くことの集団的实践と自己形成—』（博士論文、2010 年、お茶の水女子大学）は、第一次資料をもとに 1950 年代の生活記録サークルの姿を描こうと試みたものである。

生活記録運動の定義にかかわって以下若干の補足的なコメントをさせていただきます。

まず生活記録という言葉ですが、日常的な使用以外に特定の意味や意図を付与して個別の文脈で意識的に用いられる場合があります。例えば、1950 年以前では、1920 年代頃の学校教育や綴方教師の実践のなかで、1920～30 年代のプロレタリア文学運動・労働運動において、戦時下の大日本青年団の生活記録報道運動、新生活運動などにおいてです²。1950 年代半ばになって生活記録運動という言葉が使われるようになり、そのなかで鶴見和子は生活記録を次のように定義しました。「生活記録とは、おとなが、自分の感じたこと考えたことを、ほかの人びとに伝えるために、その感じや考えの発生のきっかけとなった事物を、借りものではない自分自身の生活のコトバで、具体的に書いた文章である。そしてそれは、自発的に形成された小集団のなかで、持続的に書かれることが本来の形である。発生史的にみれば、子どもの人間形成のための教育方法として戦前から行われてきた生活綴方に学んで、おとなが人間改造のための自己教育の方法として戦後にはじめたものである」³。

生活記録運動について見れば、管見の限り 1954 年 5 月、日本青年団協議会(日青協)が定期大会第九号議案「女性の地位を高めることについて」のなかで「生活記録運動をすすめる」として用いたのが最初と思われますが、この時点では生活記録運動という言葉を用いるにあたっての明確な意図や自覚は必ずしもなかったようです⁴。その後、日青協役員が日本生活記録研究会を発足させ、

1955 年 2 月に機関紙『生活記録運動』を創刊します。ここでは、「共同学習」の具体的な方法として生活記録に期待し、青年たちの現実生活の改善と青年集団の学習活動の進展という方向性を明確に持つ学習運動として「日本国中のすべての青年」に広げようと掲げられました。書くことと行動とを一体のものとする、自分の生活からもの考える人間をつくりあげること、書くことを目的とせず自分の人生・村・日本をどうするかという問題が重要であることが生活記録運動を広める理由であるとされています。

他方、実際には、例えば山形県に見られたように⁵、地域の青年会等において「作文」「綴方」「生活記録」を書いたりノートの回覧や文集の作成をしたり、またそれを読み話し合うといった活動は、1950 年代半ば以前より散発的に展開されており、それが「生活記録」「記録活動」「生活学習」「生活綴方」「らくがき帳」など様々に呼称されていました。

同時に、地域青年団や日青協とは異なる文脈でも生活記録運動は頻繁に使われるようになっていきます。国分一太郎は、1955 年 5 月刊行の著書で「おとなが生活綴方作品を書く運動」が「『生活記録』を書く運動」、つまり「生活記録運動」と呼ば

² 拙稿「1950 年代日本の社会的文化的状況と生活記録運動—生活記録運動の系譜に関する考察(2)—」『神奈川大学心理・教育研究論集』第 29 号、2010 年他。

³ 『生活綴方事典』日本作文の会編、明治図書、1958 年、439-440 頁。

⁴ 議案の具体的な目標は「人間の権利をまもろう」「自分で考え自分で行動する力をつけよう」「合理的な生活態度をつけよう」と示されている。ここでは、「その時々」に気のついたことを書いておく」他に小遣いや労働時間、賃金、食事の内容などが生活記録として想定されており、「科学的に生活を分析し合理的な生活にきりかえる」ことが目指された。なお本議案書では「生活記録活動の推進」「生活記録」「生活綴方」「生活学習」などが混在する一方で、「生活綴方」と「生活記録」は異なるものとして明確に使い分けられている。生活綴方＝子ども／生活記録＝大人という区別でないところに注目すべきだろう。

⁵ 山形県北村山郡長瀬村では昭和 21 年秋、農学校生徒を中心としたグループが教師を仲間に入れて小学校の宿直室で学習会を始め、しだいに農業に関することや日常の話をノートに記録していき文集を作成するようになった。この村はかつて国分一太郎が教壇に立ち弾圧を受けた村であり、この報告を書いた小学校教師・石垣邦雄は当時の国分の教え子であった。こうした取り組みは学校教師の横のつながりによって支えられていた。1946 年に「山形県児童文化研究会」(土田茂範、樋口実、庄司敬蔵、那須貞太郎、鈴木久夫、山田とき他)が結成され、続いてそのメンバーが各地域で「おいたま児童文化研究会」「東置賜郡児文研」などを展開していった。教師はしばしば地元地域の青年団員でもあった。1950 年代に入ると、生活記録文集『溪流』(南置賜郡南原村綱木青年学級)、文集『おさなぎ』(東根町神町若木青年会)、文集『ともしび』(南置賜郡玉庭村朴沢の青年たち)、南置賜郡三沢村西部の青年たちの複数の生活記録文集、文集『ぬなは』(川土居村沼山青年団)などが編まれた。なかでも『溪流』は「青年の山びこ学校として全国的に注目された」と言われている(須藤克三「山形県の青年文化運動史—生活記録運動を中心として—」山形県社会教育研究会編・発行『農村における小集団の研究』1958 年、同「農村青年の生活記録サークル—底辺からの文化革命—」『文学』1959 年 10 月他)。

れているとし⁶、これを引き継いで鶴見和子も、同年8月発行の雑誌『文学』で「生活記録運動」は「おとなの生活つづり方運動」⁷だとしました。

さらに生活記録運動という言葉が広がってゆく素地として、新聞読者投稿欄への投稿ブーム、手記集・生活記録・体験記・作文集・投稿集などと銘打った多数の単行本刊行、同好会やサークルの文集づくりや雑誌読者・投稿者の会の隆盛といった当時の状況も指摘できます。「平野のなかの農村や都市の裏町や大工業の作業場というまでもなく、大洋に面する漁村や山かげの炭鉱部落から学校・病院・裁判所・国鉄・商店のなかでも、あすの生活へのアスピレーションに励まされた若い人々の集団的活動」が「明るい炎のように燃えひろまって」「にわかには勢いを増し、誰ももうその力を無視することができない」と表現された1950年代のサークル運動において、「生活記録の運動」は「たくさんの地域的な一しぼり職業や階層も一致している人々の一サークル活動の主体はここにある」と紹介されています⁸。

以上の動向を俯瞰して生活記録運動を最大公約数的に定義するなら、ものを書くことを生業としない人びとが自分の体験や生活を具体的・写実的な文章で書く行為およびそれを誰かと共有するいとなみの総体を指す言葉だと言えます。それは多様な実態を含み、ゆえに各々にとっての生活記録運動もまた多彩な様相を見せました。

2. 「生活記録運動的発想の継承」をめぐって

では、被爆者（証言）運動は、いかなる意味で「生活記録運動的発想の継承」（東村報告）と言えるのでしょうか。この点に関する東村さんの見解を要約すれば、「長崎の証言の会」と鎌田定夫を通して見た「証言」運動とは、生活記録運動と「親和性」を有しながらも、「実感べったり主義」批判克服のため「証言」という言葉を選んだように生活記録運動の「欠点や限界」を「突破」したり「補

ったり」して展開したとなります⁹。ただし今回の報告では「生活記録運動的な発想」「親和性」の中身は必ずしも明確でなく、証言と生活記録との関係もややわかりづらかったように思われました。

ところで生活記録運動の経験を基盤としながら1960年代以降も記録にこだわって運動を展開した人物という点で、東村報告の鎌田定夫に並べて「生活を記録する会」の澤井余志郎を見てみましょう。澤井は四日市公害の「語りべ」とも呼ばれ、患者へのききとりを積み重ねながら公害反対運動・住民学習活動・公害訴訟に伴走し、それらを記録・発信しつづけました。当初、澤井は、「生活記録運動で培われたもの」を公害反対運動に生かそうと考えますが失敗します。けれども患者のもとに通いつづけ信頼関係を築くなかで、しだいにいろいろな話を聴くようになり、それを文字化するようになりました。文字化された記録を見せると最初は気のない反応だった患者たちも、しばらくして「わしも結構いいことを言うとな。やっぱりあきらめとったらあかん」と喜んでくれたといいます。澤井自身も文章化しガリ切りをする作業の中で公害そのものにじかに触れることとなり、公害反対の進め方についての思いをめぐらせていくようになりました¹⁰。

鶴見和子はこれを澤井の生活記録の「後史」（前史は紡織工場での「生活を記録する会」）と呼び、「ききとり書きをも、生活記録のはんちゅうに入れたといういみで、方法において、後史は前史よりも枠をひろげた、ということが出来る」と評価しました¹¹。ただし澤井自身は必ずしも公害記録を「生活記録のはんちゅう」とは見えていなかったように思われます。もちろん生活記録運動の経験なしには公害記録の活動が展開し得なかったのは事実ですが、生活記録と公害記録とは区別されています。澤井は「生活記録運動で培われたもの」を次のように表現しています。「いつも“なぜ”と考え

⁶ 国分一太郎『生活綴方ノート II』新評論社、1955年5月、70頁。

⁷ 鶴見和子「生活記録運動—自然発生的なものと意識的なものとのむすびつきについて—」『文学』1955年8月

⁸ 佐々木斐夫「サークル運動の歴史的な意味」『中央公論』1956年6月。

⁹ 研究会当日の東村報告に加えて東村岳史『『生活記録』から『証言』へ—『長崎の証言の会』創設期と鎌田定夫』『原爆文学研究』11号、2012年。

¹⁰ 澤井余志郎『ガリ切りの記—生活記録運動と四日市公害』影書房、2012年。

¹¹ 鶴見和子「沢井余志郎さんと生活記録」澤井余志郎編『くさい魚とぜんそくの証文—公害四日市の記録文集』はる書房、1984年、11頁。なおそこで鶴見は『長崎の証言』シリーズにも言及している。

る、自分の考えをもつ人間になろう」「見たまま、聞いたまま、思ったままを、ありのまま、飾らずに、自分の言葉で書こう」「書いた綴り方を、仲間たちで読みあい、話し合い、行動しよう」「行動したことを記録し、まとめ、確かめる、そうする中で“自己改造”をすすめよう」¹²。

「生活・記録」（東村報告）と「生活記録」、「生活記録」と「生活記録運動」、「生活記録」と「ききとり書き」との関係など論点を整理しつつさらに議論を深めたいところだと思いました¹³。

3. 言葉とその意味の生成—生活記録と記号論

榊原報告を受けて私が想起したのは、鈴木久子「書くことと生活」（生活を記録する会『なかまたち』3号、1955年3月）という生活記録です。その一部を紹介してみます。

この手は、八時間
糸をつなぐ、布を織る
わたしらの手だ
冬は しもやけで
まんまるになっても
糸をつなぐ
昔から女工

とまで書いて、次を書けなくなった。

わたしが書こうとしていた“世間の人に昔からゆがんでみられる、哀れな女”とでも書きたかったのだが一寸も哀れでも、なんでもない、「女工」という字になってしまった。そこで、

この手は、
糸をつなぐ、布を織る
そして
思った通り、見た通り
考え話し合って

書いていく
りっぱな
わたしら女工の手だ

のような詩を書いた。この時、ふっとわかったような気がした。

“働くということは、人間にとって一番大切なことだ”

という、ほんものが、こういうもので、今迄自分の持っていたものは、まだ本ものではなかったんだということ、

“活動やっているという女工が、恥ずかしいのでなしに、女工というこれだけの自分でも、恥ずかしくない、あたりまえのことだ、働く女、大切な人間なんだ”

こんなふうにした。これは最も最近なものだから、他の人にもわかるように、書くことができません。「大して変わったことではない」と言うかも知れんが、わたしには、大したことだ、もう少し成長？したら、もっと、まとまったことがかけると思う。

こんなことで、本を読んだり話しあったりして、リクツ(理論)では知っていても、やはり、自分のものになって、それが活きる様になるには、やること(実践)のつきかさねが必要だと思った。

自分の言葉（内言）を文字にして自分の外に出したところ、その言葉（文字）によって自分の感覚・認識がとらえかえされ（自己内対話）、そのとらえかえしの軌跡をまた文字として書き綴ってゆく、書くことそのものが思考の実践とも読めるような生活記録です。

また、「生活を記録する会」の記録には、対話・会話や集団での話し合いの記録など発言をそのままに近い形で記したと見られる記録も多数見られ、それらを読んだ記録が、さらにまた綴られていきました。各々のつぶやきや逡巡をも拾うこうした記録は、集団内対話と集団的思考の過程の記録とも言えるでしょう。これは継続して編まれた文集全体を読み通してみることによって、よりはっきりとその輪郭を現してくるように思えます。このように、生活記録といっても、一つのサークルの

¹² 澤井前掲（2012）、61頁。

¹³ なお東村報告が挙げた拙稿（2010:5）の見解を補足すると、1960年代以降の生活記録の具体的な実践としては、農村女性の集団の実践や公民館・社会教育活動のなかで生み出される学習記録、地域青年団・日青協の学習・運動やそこで作成されるレポート、さらには識字運動のなかで作成される文集などを想定していた。

なかでさえ、その表現の仕方にずいぶん巾があることがわかります。

4. 生活記録実践と 1950 年代の政治的文脈

私が見たところ生活記録運動の実践者として周囲からみなされる人びと自身が必ずしも自らを運動の担い手だと自覚的に考えていたわけではなかったですし、逆に、先の鶴見和子の定義で言うような生活記録とは異なる実態であっても生活記録運動（あるいはそれに連なるもの）として自認したり他者に認識されたりする場合もありました。これらのことは、生活記録をめぐる議論を必要としていたのが誰だったのかという点にかかわって興味深いことだと考えます。また、これは、生活記録運動という名づけ（命名行為）が誰にとってどのような意味を持つものだったのかという議論につながるものと考えます。

個々の実践現場との直接的なかわりや言えば、世間やメディアや「知識人」たちが、ある個人やサークルを語り論じることが、実践のその後の展開にどのような影響や作用を与えたのかというのが気になります。話す・書く・読むといったいとなみがおかれていた文脈とかわらせて書かれた記録としての生活記録も見てゆく必要があるでしょう。

榊原報告は、『思想の科学』や鶴見俊輔が戦後文学批評の世界においてほぼ無視されてきたことを指摘していました。生活記録運動に対する当時の議論や評価もまた 1950 年代の政治的対立状況を加味して読まれるべきでしょうし、当時様々な論争が繰り広げられた教育学研究における生活綴方・生活記録運動への評価についても同様でしょう。政治的文脈がいかに関心を規定したか、研究や「知識人」の思考を制限し左右したか、そうした点も具体的にもっと明らかにしたいところです。

なお、これは、1950 年代末の生活記録運動「停滞」「衰退」言説をどう読み解くかということとも関連することだと考えます。1960 年代以降になる

と、1950 年代であれば生活記録運動と呼ばれたであろうと思われる生活記録の実践が、もはや生活記録運動とは呼ばれなくなっていくわけですが、その要因として、「人びとが書く」と「知識人」との関係のありよう（あるいは「知識人」にとって生活記録が持つ意味の変化）がかかわっていると考えるからです。

東村報告では、やはり証言と社会運動との関係が焦点になるだろうと思いました。話し・書く内容には、それがどのような関係性や場のなかで行われるのか、誰が書くのか、誰に向けて書くのか、といった文脈が深くかかわっています。証言者と鎌田との関係、証言者どうしの関係、さらにその時々の運動に求められていたものとの関係のなかで、その記録の内容をたどると何が見えるのか、そうした点もぜひ考えたいと思いました。

以上です。

（本稿は、合同研究会で行ったコメントを再構成し、研究会当日に時間の関係で省略した内容や補足説明を若干加えてまとめたものである。）

（つじ ともこ・北海道大学）